様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３４３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｈ０１３２７

研究課題名（和文）モンゴルの世界遺産ブルカン・カルドゥン山に関する歴史文献学及び文化遺産学的研究

研究課題名（英文）Studies on the Historiography and Cultural Property of the World Heirtage Site of Great Burkhan Khaldun Mountain in Mongolia

研究代表者
松川　節（MATSUKAWA, Takashi）

大谷大学・社会学部・教授

研究者番号：６０３２１０６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,600,000円

研究成果の概要（和文）：ユネスコの世界文化遺産である大ブルカン・カルドゥン山をチンギス・カンと結びつける歴史資料及び現地伝承を博捜し，チンギス・カンの陵墓の所在地について歴史文献学的な結論を提示するとともに，大ブルカン・カルドゥン山の保存・保護・観光マネジメントに関して文化遺産学的研究を行い，国際シンポジウムを開催するなど，この貴重な遺産を過去から未来へといかに継承していくかを国際共同研究によって明らかにした。
　研究の結果，チンギス・カン及び黄金の氏族の陵墓の候補地は，従来説の大ブルカン・カルドゥン山周辺の「大ホリグ（＝大禁地）」とともに，モンゴル国に複数伝承される「ホリグ」も同様に該当することが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
チンギス・カンの陵墓所在地については「大ブルカン・カルドゥン山」（＝ヘンティー・ハン山）一帯のどこかという説が有力であるが，歴史文献学的考証を経ずに内外の調査隊によるセンセーショナルな報道が先行しているのが実状であった。これに対して本研究は大ブルカン・カルドゥン山とチンギス・カンを結びつけるモンゴル語，漢語，ペルシア語などの歴史資料・現地伝承を写本レベルに遡って再検討して文献に基づく最新の知見を明らかにした点に学術的意義があり，また，モンゴルと日本の研究者がこの貴重な遺産の保存・保護，観光マネジメントに関して文化遺産学的な共同研究を行い，未来への継承について検討した点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：We conducted an international collaborative research project to explore the historical records and local traditions connecting the Great Burkhan Khaldun Mountain, a UNESCO World Heritage site, with Chingis Khaan. Our objective was to present a historical conclusion regarding the location of Chingis Khaan's tomb based on historical sources. Additionally, we conducted a cultural heritage study on the conservation, protection, and tourism management of the Great Burkhan Khaldun Mountain, aiming to ensure the preservation and transmission of this valuable heritage from past to future, organizing the international symposium to disseminate our findings.

As a result of our research, we have discovered that the potential locations for Genghis Khan's tomb, as well as the tombs of the Golden Family, include the traditional site near the Great Burkhan Khaldun Mountain known as "Ikh Khorig (Great Forbidden Area)" and other "Khorig" sites that are documented in multiple traditions within Mongolia.

研究分野：北アジア史

キーワード：大ブルカン・カルドゥン山　チンギスカンの陵墓　ユネスコ世界文化遺産　モンゴル帝国　文化遺産学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

2015 年にユネスコ世界文化遺産に登録されたモンゴル国の「大ブルカン・カルドゥン山」は、13 世紀にモンゴル帝国を創建したチンギス・カンの生誕地かつ埋葬地と見なされている。チンギス・カンの陵墓のありかは 20 世紀最大の謎の一つと見なされ、その探索は 1990 年代から行われてきたが、歴史文献学的考証を経ることなく、内外の調査隊によるセンセーショナルな報道が先行してきたのが実状である。これに対して代表者らは、①チンギス・カンの生涯、特にその陵墓のありかと大ブルカン・カルドゥン山との関連については、文献史料によるアプローチの余地がまだまだ残されているのではないか。②大ブルカン・カルドゥン山が世界文化遺産に登録され、モンゴル人だけでなく人類共通の遺産となった今、その正確な歴史像を次の世代に伝えていくために文化遺産学的観点から保存･保護､観光マネージメント方策を検討するべきではないか。という学術的「問い」を立てて研究を開始した。

２．研究の目的

本研究は、①大ブルカン・カルドゥン山とチンギス・カンを結びつける歴史資料及び現地伝承を博捜し、陵墓所在地について歴史文献学的な結論を提示するとともに、②大ブルカン・カルドゥン山の保存・保護、観光マネージメントに関して文化遺産学的研究を行い、③この貴重な遺産を次の世代にいかに継承していくかを日本とモンゴルの研究者による共同研究によって明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

研究は、日本とモンゴル国の研究者が 3 つのタスクフォース：１＜大ブルカン・カルドゥン山とチンギス・カンの関わりについての歴史文献学的研究＞（歴史学＋言語文献学＋考古学の 8 人（松川節、三宅伸一郎、小野浩、白石典之、松田孝一、伊藤崇展、S.チョローン、B.ツォクトバータル））、２＜大ブルカン・カルドゥン山についての民族誌的研究＞（歴史学＋民族学＋仏教学の 4 人（松川、J.サロールボヤン、三宅、N.アムガラン））、３＜大ブルカン・カルドゥン山についての文化遺産学的研究＞（保存科学＋文化遺産学＋文化景観学の 5 人（二神葉子、G.エンフバト、本中眞、B.ハシマルガド、山口欧志））に分かれてそれぞれ共同研究を行った。

◆2019 年度

①国内研究会を 2 回開催(6 月 15 日と 1 月 18 日、於:大谷大学)して原典史料の会読とモンゴル側が提示している保存保護策の検討を行い、②現地モンゴルでは現地資料・伝承の収集研究を行った。

①のうち、第 1 回国内研究会にて研究協力者の松田孝一(大阪国際大学名誉教授)が「ブルカン・カルドゥンについての文献資料(ペルシャ語、モンゴル語、漢語)」、同じく研究協力者の本中眞(奈良文化財研究所所長)が「富士山-信仰の対象と芸術の源泉-その世界遺産登録への経過と今後の方向性」と題して報告した。第 2 回国内研究会に合わせてモンゴル側研究協力者の B.ツォクトバータル(モンゴル科学アカデミー考古研究所)と B.ハシマルガド(モンゴル国自然環境省ハン・ヘンティ特別保護行政局)を招聘し、「ブルカン・カルドゥン山の調査経緯」、「世界文化遺産登録後のブルカン・カルドゥン山」と題する報告を得た。また、研究分担者の小野浩(京都橘大学)が「ブルカン・カルドゥン山についてのペルシア語資料」、研究協力者の大高康正(静岡県富士山世界遺産センター)が「富士山信仰史の諸段階―16 世紀までを中心に」、研究協力者の堀内眞(山梨県立富士山世界遺産センター)が「17 世紀以降の富士山信仰―冨士講および富士道の調査成果―」と題してそれぞれ報告した。②松川がモンゴル国ヘンティー県大ブルカン・カルドゥン山周辺にて現地調査(4/25-5/6、10/8-10/15)を行い、また松川と研究協力者の伊藤崇展がモンゴル国西部のゴビアルタイ県､ホブド県､バヤンウルギー県にて現地調査(8/4-8/21)を行った。

◆2020 年度

2020 年度は新型コロナウイルスの蔓延により、予定していた全ての現地調査を先送りにせざるを得なかった。そこで、研究の目的①の「現地伝承」を共有する目的で、既発表のモンゴル語による関連論文の日本語訳を以下のように作成し、オンラインで共有した。

S. チョローン「ブルカン・カルドゥン山についてのモンゴルの学者の研究」、Kh.ペルレー「イフ・ホリグはどこにあるのか」、Z.バトサイハン、N.ダワー、Zh.ボル「テンゲリーン・オボーは大ハーンの墓か」。また､日本語で著された関連研究論文をモンゴル側研究者と共有する目的で、以下の論文のモンゴル語訳を作成した。加藤晋平「調査報告：モンゴル国ゴルバン・ゴル=プロジェクト調査について」、白石典之「モンゴル部族の自立と成長の契機―10 世紀から 12 世紀の考古学資料を中心に―」、白石典之「チンギス・カンの墓」。また、モンゴル側共同研究者との共同研究としては、2021 年 3 月 19 日（水）にオンラインで成果報告会を開催し、モンゴル側研究者 B.ツォクトバータル(モンゴル科学アカデミー考古研究所)、B.ハシマルガド(モンゴル国自然環境省ハン・ヘンティ特別保護行政局)より研究成果の報告を受けた。

◆2021 年度

2021 年度も新型コロナウイルスの蔓延により、予定していた現地調査を先送りにせざるを得

なかった。そこで、上記①の研究目的に沿って 6 月 5 日に第 1 回研究集会をオンライン開催し、歴史資料に見られる「大ブルカン・カルドゥン山」についてのペルシア語、漢語、モンゴル語、チベット語、満洲語資料を講読・研究し、研究分担者の小野浩、三宅伸一郎、研究協力者の松田孝一、伊藤崇展がそれぞれ報告した。

2 月 21 日～23 日、本年度初の海外現地調査（モンゴル国）が実現し、モンゴル側研究協力者の B.ツォクトバータル・モンゴル科学アカデミー考古研究所研究員、N.アムガラン・ガンダン寺学術文化研究所事務局長と共同研究を実施した。N.アムガラン氏とは、大ブルカン・カルドゥン山祭祀に関わるチベット語文献６点のローマ字転写・モンゴル語訳作成作業を行った。続いてモンゴル科学アカデミー考古研究所を訪問し、B.ツォクトバータル研究員とともに G.エレグゼン所長を表敬し、モンゴル日本共同「ハン・ヘンティ」プロジェクト（＝本科研プロジェクト）の成果概要を説明し、今後の共同研究の方向性および近年のモンゴル国における考古学的発掘成果について意見を交換した。

◆2022 年度（繰越分）

2022 年 4 月～10 月初旬まで松川は本務校の在外研究制度でモンゴル国に滞在しつつ、本研究に関連してヘンティー県及びスフバータル県にて大ブルカン・カルドゥン山に関連する考古遺跡の現地調査を行い（6 月 15 日～17 日）、また、モンゴル国で開催された複数の国際会議に参加した。さらに本プロジェクトの成果を総合的に検討する目的で、9 月 16 日にウランバートル市にて国際シンポジウムを開催した。11 月 12 日に研究集会「モンゴル国東部現地調査報告」をハイブリッドで開催し、B.ツォクトバータル研究員が「モンゴル秘史地名プロジェクトの成果と展望」というテーマで、対面で研究報告を行った。

４．研究成果

◆2019 年度

2019 年度の主たる目標である「大ブルカン・カルドゥン山とチンギス・カンを結びつける歴史資料」の収集・会読については国内研究会を 2 回開催することによって研究の基盤を構築することができた。また現地モンゴル国のヘンティー県大ブルカン・カルドゥン山周辺及び西部のホブド県、バヤンウルギー県、ゴビアルタイ県にて延べ 38 日間の調査を実施し、大ブルカン・カルドゥン山のドード・オボーとドンド・オボーの表面調査、ホブド県ムンフハイルハン郡、バヤンウルギー県ボルガン郡、ゴビアルタイ県ダルビ郡においてオリヤンハイ部族についての現地伝承の収集・研究を行うことができた。また、文化遺産学的観点から、世界遺産富士山との比較研究を開始することができており、初年度の研究計画は概ね順調に進行した。しかしながら、2020 年 2 月・3 月に計画していた現地調査が新型コロナウイルス蔓延のため実施できず延期となったことにより、研究計画の一部は達成できなかった。

◆2020 年度

新型コロナウイルス蔓延により調査対象地域であるモンゴル国への入国が許可されなかったため、前年度の 2020 年 2 月・3 月に行うべく現地調査を本年度へと延期したが、本年度に行うべく現地調査とともに実施できなかった。代わりとして、上述の翻訳論文集を作成した。

◆2021 年度

6 月 5 日開催の第 1 回研究集会の成果：小野浩「モンゴル君主の埋葬地・補遺―志茂碩敏『モンゴル帝国史研究 正篇』より―」、三宅伸一郎「チベット語「ムングン・モリト」山祭祀文講読」、松田孝一「日月山の位置比定の試み」、伊藤崇展「マンジュ語史料における 「ハン・ヘンティ」――『庫倫事宜』の事例――(参考資料)」を共有した。

当初研究期間完了間際の 2 月 21 日～23 日、コロナ禍以降初の海外渡航が実現し、二年間オンラインで継続してきたモンゴル側研究者との共同研究の成果を対面にて確認しあった。

◆2022 年度（繰越分）

9 月 16 日、モンゴル国ウランバートル市のモンゴル国立文化遺産センター大会議室において、国際学術会議「世界文化遺産ブルカン・カルドゥン山：研究・マネージメントの諸問題」がハイブリッド形式・日本語とモンゴル語の同時通訳形式で開催され、松川「ブルカン・カルドゥン山と周辺の聖なる景観地区における岩壁文字資料について」、白石「馬の肋骨を用いたチンギス・カン祭祀」、二神「（日本）文化審議会世界文化遺産部会による「我が国における世界文化遺産の今後の在り方（第一次答申）」の特徴と意義」、小野「ペルシア語史料に記述されたモンゴル君主の埋葬地」、三宅「ハン・ヘンティに関連するチベット語によるいくつかの祭祀文について」、山口「ハン・ヘンティ・プロジェクト関連文化遺産の三次元記録」、松田「ブルカン・カルドゥンと日月山」、伊藤「マンジュ語史料における 「ハン・ヘンティ」――『庫倫事宜』の事例――」、J.サロールボヤン「画家 L. マフバルがダダル郡のゴルバン・ノールにてチンギス・ハーンの歴史遺物を著すに至った意図並びに初期デザインの創造について」、大高康正（静岡県富士山世界遺産センター）「富士山の信仰の歴史」、堀内亨（山梨県立富士山世界遺産センター）「富士信仰の現状と課題　～北面（山梨県側）からの視点～」がそれぞれ報告し、本中眞（奈良文化財研究所）、B.ハシマルガドが挨拶し、B.ツォクトバータルが総括コメントを述べた。会議の成果論文集は 2023 年 3 月 31 日に『国際学術会議「世界文化遺産ブルカン・カルドゥン山：研究・マネージメントの諸問題」論文集』と題して刊行された。

以上の成果をまとめると、チンギス・カン及び「黄金の氏族」の陵墓は、伝存する歴史資料の

再検討によっても従来説の大ブルカン・カルドゥン山周辺の「大ホリグ（＝大禁地）」が候補地としてふさわしいと確認されるとともに、歴史書に登場する複数の「ホリグ」が、それぞれモンゴル国に複数伝承される「ホリグ」と対応する可能性も明らかにされ、これらも陵墓の候補地として同様に可能性を有することが判明した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 白石　典之	４．巻 1
２．論文標題 モンゴル帝国の祭祀とウマ犠牲	５．発行年 2023年
３．雑誌名 諫早直人，向井佑介編『馬・車馬・騎馬の考古学：東方ユーラシアの馬文化』	６．最初と最後の頁 59-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松田　孝一	４．巻 10
２．論文標題 モンゴル帝国の統治制度とウルス	５．発行年 2023年
３．雑誌名 荒川正晴等編『岩波講座 世界歴史』 岩波書店	６．最初と最後の頁 77-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松川　節	４．巻 10
２．論文標題 コラム　モンゴル高原のメトロポリスとしてのカラコルム	５．発行年 2023年
３．雑誌名 荒川正晴等編『岩波講座 世界歴史』 岩波書店	６．最初と最後の頁 105-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松川　節	４．巻 7
２．論文標題 「ヘルレン・バルスホトⅠ城址とチンギス・ハーン嶺北長城に関する覚え書き」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『モンゴルと東北アジア研究』	６．最初と最後の頁 5-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 白石典之	4．巻 80（1）
2．論文標題 「モンゴル帝國における「焼飯」祭祀」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『東洋史研究』	6．最初と最後の頁 69-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三宅伸一郎，松川節，伴真一朗	4．巻 39
2．論文標題 「イェシェー・ペルデン著 『モンゴル仏教史・宝の数珠』チベット・モンゴル語対照訳注（1）」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『真宗総合研究所研究紀要』	6．最初と最後の頁 215-271
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 МАЦУКАВА Такаши	4．巻 1
2．論文標題 До:рво:лжин у:сгийн хэрэглээний бодит байдлын зарим асуудал.	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Их монголын до:рво:лжин у:сэг	6．最初と最後の頁 34-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 MATSUDA Koichi	4．巻 1
2．論文標題 “Comparing the Depictions of the Mongol Courts Created in the Yuan and the Ilkhanate”	5．発行年 2021年
3．雑誌名 New Approaches to Ilkhanid History	6．最初と最後の頁 176-197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松川　節	４．巻 168
２．論文標題 ふたつの旧暦をめぐる論争―モンゴル国	５．発行年 2019年
３．雑誌名 季刊　民族学	６．最初と最後の頁 53-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計27件（うち招待講演　0件／うち国際学会　24件）

１．発表者名 松田　孝一
２．発表標題 Burqan QaldunとRiyue shan a’ula
３．学会等名 モンゴルの世界遺産ブルカン・カルドゥン山に関する歴史学・文献学及び文化遺産学的研究2022年度研究集会（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 B．ツォクトバータル
２．発表標題 モンゴル秘史地名プロジェクトの成果と展望
３．学会等名 モンゴルの世界遺産ブルカン・カルドゥン山に関する歴史学・文献学及び文化遺産学的研究2022年度研究集会（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 伊藤崇展
２．発表標題 大元ウルス中葉期におけるモンゴル高原向け軍糧調達方策の運用実態
３．学会等名 第119回史学会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 二神　葉子
２．発表標題 日本国の文化遺産保護システムと法的環境－最近の文化財保護法改正に関するいくつかの話題－
３．学会等名 モンゴル日本文化遺産フォーラム（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 白石　典之
２．発表標題 馬の肋骨を用いたチンギス・カン祭祀
３．学会等名 国際学術会議「世界文化遺産ブルカン・カルドゥン山：研究・マネージメントの諸問題」（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 大高　康正
２．発表標題 富士山の信仰の歴史
３．学会等名 国際学術会議「世界文化遺産ブルカン・カルドゥン山：研究・マネージメントの諸問題」（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 堀内　亨
２．発表標題 富士信仰の現状と課題　～北面（山梨県側）からの視点～
３．学会等名 国際学術会議「世界文化遺産ブルカン・カルドゥン山：研究・マネージメントの諸問題」（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Ｊ．サロールボヤン
２．発表標題 画家L．マフバルがダダル郡のゴルバン・ノールにてチンギス・ハーンの歴史遺物を著すに至った意図並びに初期デザインの創造について
３．学会等名 国際学術会議「世界文化遺産ブルカン・カルドゥン山：研究・マネージメントの諸問題」（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 小野　浩
２．発表標題 ペルシア語史料に記述されたモンゴル君主の埋葬地
３．学会等名 国際学術会議「世界文化遺産ブルカン・カルドゥン山：研究・マネージメントの諸問題」（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 松田　孝一
２．発表標題 ブルカン・カルドゥンと日月山
３．学会等名 国際学術会議「世界文化遺産ブルカン・カルドゥン山：研究・マネージメントの諸問題」（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 松川　節
２．発表標題 ブルカン・カルドゥン山と周辺の聖なる景観地区における岩壁文字資料について
３．学会等名 国際学術会議「世界文化遺産ブルカン・カルドゥン山：研究・マネージメントの諸問題」（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 伊藤　崇展
２．発表標題 マンジュ語史料における 「ハン・ヘンティー」――『庫倫事宜』の事例――
３．学会等名 国際学術会議「世界文化遺産ブルカン・カルドゥン山：研究・マネージメントの諸問題」（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 山口　崇志
２．発表標題 ハン・ヘンティー・プロジェクト関連文化遺産の三次元記録
３．学会等名 国際学術会議「世界文化遺産ブルカン・カルドゥン山：研究・マネージメントの諸問題」（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 三宅　伸一郎
２．発表標題 ハンヘンティーに関連するチベット語によるいくつかの祭祀文について
３．学会等名 国際学術会議「世界文化遺産ブルカン・カルドゥン山：研究・マネージメントの諸問題」（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 小野浩
２．発表標題 集史に現れる「ブルカン・カルドゥン」と「ブダ・オンドル」について
３．学会等名 「モンゴルの世界遺産ブルカン・カルドゥン山に関する歴史文献学及び文化遺産学的研究」2021年度第1回研究集会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 松田孝一
２．発表標題 漢文史料に現れる「日月山」と「ブルカン・カルドゥン」
３．学会等名 「モンゴルの世界遺産ブルカン・カルドゥン山に関する歴史文献学及び文化遺産学的研究」2021年度第1回研究集会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊藤崇展
２．発表標題 満洲語割案文書に現れる「ハン・ヘンティー」について
３．学会等名 「モンゴルの世界遺産ブルカン・カルドゥン山に関する歴史文献学及び文化遺産学的研究」2021年度第1回研究集会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 三宅伸一郎
２．発表標題 チベット語資料に現れる「ハン・ヘンティー」について
３．学会等名 「モンゴルの世界遺産ブルカン・カルドゥン山に関する歴史文献学及び文化遺産学的研究」2021年度第1回研究集会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 松川節
２．発表標題 ヘルレン・バルスホトＩ城址とチンギス・ハーン嶺北長城に関する覚え書き
３．学会等名 第14回ウランバートル国際シンポジウム 「日本・モンゴル関係の百年　―　歴史、現状と展望」（於：ウランバートル市モンゴル国立大学）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 松田　孝一
２．発表標題 ブルカン・カルドゥンについての文献資料（ペルシャ語、モンゴル語、漢語）
３．学会等名 ハンヘンティー・プロジェクト2019年度第1回研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 本中　眞
２．発表標題 富士山―信仰の対象と芸術の源泉―　その世界遺産登録への経過と今後の方向性
３．学会等名 ハンヘンティー・プロジェクト2019年度第1回研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 B．ツォクトバータル
２．発表標題 ブルカン・カルドゥン山の調査経緯（モンゴル語；通訳あり）
３．学会等名 ハンヘンティー・プロジェクト2019年度第2回研究集会（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 B．ハシマルガド
２．発表標題 世界文化遺産登録後のブルカン・カルドゥン山（モンゴル語；通訳あり）
３．学会等名 ハンヘンティー・プロジェクト2019年度第2回研究集会（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 小野　浩
２．発表標題 ペルシャ語文献にみるモンゴル王家の埋葬地
３．学会等名 ハンヘンティー・プロジェクト2019年度第2回研究集会（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 大高　康正
２．発表標題 富士山信仰史の諸段階ー16世紀以前を中心に
３．学会等名 ハンヘンティー・プロジェクト2019年度第2回研究集会（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 堀内　眞
２．発表標題 江戸時代以降の富士信仰―吉田の御師と檀那所を中心に―
３．学会等名 ハンヘンティー・プロジェクト2019年度第2回研究集会（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 二神　葉子
２．発表標題 「（日本）文化審議会世界文化遺産部会による「我が国における世界文化遺産の今後の在り方（第一次答申）」の特徴と意義」
３．学会等名 国際学術会議「世界文化遺産ブルカン・カルドゥン山：研究・マネージメントの諸問題」（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計2件

1．著者名 松川節，B.ツォクトバータル，三宅伸一郎，白石典之，二神葉子，小野浩，山口欧志，松田孝一，伊藤崇展，大高康正，堀内亨，J.サロールボヤン，本中眞　他	4．発行年 2023年
2．出版社 Print Pac Co. Ltd.	5．総ページ数 180
3．書名 Proceedings of International Conference on World Cultural Heritage Great Burkhan Khaldun Mountain: Research and Management Issues.	

1．著者名 白石　典之	4．発行年 2022年
2．出版社 同成社	5．総ページ数 280
3．書名 モンゴル考古学概説	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	三宅　伸一郎 (MIYAKE Shin'ichiro) (00367921)	大谷大学・文学部・教授 (34301)	
研究分担者	二神　葉子 (FUTAGAMI Yoko) (10321556)	独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化財情報資料部・室長 (82620)	
研究分担者	小野　浩 (ONO Hiroshi) (40204250)	京都橘大学・文学部・教授 (34309)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	白石　典之 (SHIRAISHI Noriyuki) (40262422)	新潟大学・人文社会科学系・教授 (13101)	
研究分担者	山口　欧志 (YAMAGUCHI Hiroshi) (50508364)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター・研究員 (84604)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	松田　孝一 (MATSUDA Koichi)	大阪国際大学・名誉教授	
研究協力者	伊藤　崇展 (ITO Takahiro)	大阪大学	
研究協力者	バトモンフ　ツォクトバータル (Batmunkh TSOGTBAATAR)	モンゴル科学アカデミー考古研究所	
研究協力者	ジュンペレイ　サロールボヤン (Junmerei SARUULBUYAN)	元モンゴル国立図書館館長	
研究協力者	サンピルデンデブ　チョローン (Sanpildendev CHULUUN)	モンゴル国立チンギスハーン博物館館長	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	本中　眞 (MOTONAKA Makoto)	奈良文化財研究所所長	
研究協力者	ビャンバスレン　ハシマルガド (Byambasuren KHASHMARGAD)	モンゴル国自然環境観光省ハン・ヘンティー国立特別保護地区保護行政局	
研究協力者	大高　康正 (OTAKA Yasumasa)	静岡県富士山世界遺産センター	
研究協力者	堀内　享 (HORIUCHI Toru)	山梨県立富士山世界遺産センター	
研究協力者	ノロヴツェデン　アムガラン (Norovtseden AMGALAN)	モンゴル国ガンダン寺学術文化研究所	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
International Conference on World Cultural Heritage Great Burkhan Khaldun Mountain: Research and Management Issues.	2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
モンゴル	モンゴル科学アカデミー考古研究所	モンゴル国自然環境省ハン・ヘンティ特別保護行政局		